



魔法少女し
呼ばないで before

前編

zange
懺悔
ILLUST
ナポリタン
produced by
まほよば

本作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

また本作品を無断で複製、配布、転載、配信することを禁止します。

※本作品は見開き表示がデフォルトで設定されていますが、左右のページが逆で表示される場合は、左記の設定変更をお試しください。

「編集」↓「環境設定」↓「言語（もしくは言語環境）」↓「デフォルトの読み上げ方向」↓「右から左へ」を選択

目次

・ 一話	P 3	↳
・ 二話	P 10	9
・ 三話	P 19	1
・ 四話	P 33	1
・ 五話	P 47	7
おまけ短編		
・ 佐倉	P 65	2
・ アカリ母	P 69	3
・ シャーリー	P 72	5

第一話 「魔法少女ルリ、爆誕」

アカリが魔法少女となった日から遡ること半年ほど前。

昼休みの開始を知らせるチャイムが鳴ると、生徒など存在しないかのように延々と黒板に数学の公式を書き連ねていただけの太った教師が振り返り、誰に目を合わすでもなく「委員長」とだけぼそりと口にする。その声を受けて、一人の少女が手に持つシャーペンを机に置くと、短く一つ息を吐き、「起立」と号令を掛けた。

各々の生徒が椅子を引いて立ち上がる中、一人だけ机に突っ伏したまま動かない女子が目に残まる。その生徒が寝ているわけではない事を、委員長を務める彼女にはわかっていた。突然自らの身に降りかかった理不尽な運命に、立ち上がる力すら沸いてこないほど絶望するその姿は、身に覚えがあったから。

かといって委員長はその怠慢を見過ごすことをしない。けして叱責するでも、しかし同情するでもない、ともすれば冷淡にすら聞こえてしまいそうなほど毅然

とした調子でその生徒の名を呼ぶ。

「原田さん」

周囲の生徒は委員長に対して、さっさと号令を終わらせて昼休みにしてくれよ、と言わんばかりの苛立ちを隠そうともしなかった。

しかし彼女は、自身に対して向けられる舌打ちや呆れの視線を寄せ付けようともせずに、もう一度「原田さん」と声を掛けた。

「……へい」

うな垂れた女生徒はようやく力無く立ち上がる。その表情には、無理矢理立たされた億劫さを超えた、えも言われぬ虚無感が漂っていた。

この教室には教師以外は女子しか居ない。夏休みも近づき、いい加減クラスメイトの顔も見慣れていることだろう。それでもやはり誰もが彼女の美貌には一瞬目を奪われる。

太った教師は眼鏡の淵を人差し指で上げると、その年の割りには完成されきった女生徒の容貌を、脳裏に焼き付けるためか細い目で視線を向けた。

「礼」

そう口にして委員長は頭を下げる。薄っすら赤みがさしたツインテールが微か

に揺れた。

「ね、委員長。もうちょっとさあ、融通利かないのお？ ルリ体調崩して一週間休んで、久しぶりの登校なんだからさあ」

授業が終わるやいなや、数人の生徒が委員長の机を取り囲む。

しかし当の本人はその威圧めいた口調に怯む様子など欠片も見せない。

「体調、悪いの？」

委員長は教科書とノートの淵をとんとん、と机の上で小気味良い音を立てて揃えると、自分を見下ろすように囲むクラスメイト達ではなく、再び机に突っ伏しているルリに直接声を掛けた。

ルリは頬を机に押し付けて、後頭部を彼女達に向けたまま、力無く片手をひらひらと回した。

「そう。もし辛いなら保健室に行くなり、早退するなりしなさいな」

「……あい」

そんな精気の無い返答と同時に、机の上に置かれていた委員長の携帯が短く振動する。彼女は携帯を開き確認すると、微かに眉を吊り上げながらも、「それじ

「や」と何事も無かったかのように立ち上がり、淡々とした足取りで教室を出て行った。

それを見届けると、「何あれ」と気分を害した様子を露骨に示すかのように、何人かの生徒が眉をひそめる。

その中の一人がルリの机の前まで足を運んだ。

「ねえルリイ。マジで大丈夫う？」

「……………うい」

「ていうかさ、前から思ってたけど、委員長って感じ悪くね？」

「……………そう？ 真面目なだけじゃん？」

「でもさあ……………」

まだ不満げな友人の言葉を遮るように、ルリは顔を上げて溜息をついた。

「別に良いって、マジで」

「まあ、ルリがそう言うならいいけど」

不承不承といった様子で友人達もその話題から身を引く。

「はあ……………」

頬杖をつき、窓の外に目を向けるその憂いを帯びた横顔は、同性の友人ですら

ついつい目を奪われる。

「どしたんマジで？」

「んー？ ……んー……」

返事を濁しながら、今も股間を苛む違和感に溜息を我慢出来ない。

(……まだ何か挟まつてるみたい……)

昨夜の事を嫌でも思い出す。

ずっと昔から好きだった人のために取っておいた純潔。それをどこの誰ともわからないような、軽薄な男に捧げてしまった夜。

(しかもその上、滅茶苦茶変になっちゃったし……)

痛みを抑える魔術に加え、そういった事のエキスパートだと説明を受けてはいたが、それでも処女を破られながらもよがってしまった自分を恥じるように、また一つ大きな溜息を吐く。

「なに？ カズキ君と喧嘩？」

「違うって……」

その名前がぐさりと胸を刺す。恋人を守るためだとはいえ、身体をあんな男に差し出した自分の判断が正しかったのか。それがルリには未だにわからない。し

かし他に選択肢は無かった。それだけは明白だった。とはいえそうそう簡単に割り切れるものではない。

彼女は頭を抱え込むと、再度机に上半身を預けていく。

頭の中はぐちゃぐちゃで、ろくに物事が考えられない。

それでも教室に蔓延する雑音は耳に入っては通り過ぎていく。

「さっきの委員長。彼氏からのメールじゃね？」

「へー。彼氏居るんだ。まあ顔はいいもんね」

「やっぱ彼氏の前でも優等生ぶってんのかな？」

「三つ指ついてフェラとか？」

「遠距離恋愛らしいよ」

「彼氏が浮気したら最高に笑えるんだけど」

ほぼ女子生徒しかいないS商業の休み時間は、大抵品の無いゴジップな話題で埋め尽くされる。

ルリにとつても目新しさの無い光景。その日常感が却って現在自分が置かれて
いる異常な状況を殊更強調し、ルリはそんな悲壮感から身を守るように背中を丸
めた。

そんな彼女にも「遠距離恋愛」という言葉だけが耳に残る。

自分は違う。

初恋であり、現在付き合っている彼氏とは、幼い頃からいつも一緒だった。

いつでも一緒に居れる。

だからこそ、今は苦しい。

(いっその事、今だけは私も遠距離恋愛になりたい……)

そんな事を考えながら目を瞑る。

融通の利かない委員長こと、夏川エリカは颯爽と廊下を歩く。やや性急な彼女の内面を表した步調に、ツインテールが忙しなく揺れる。

教室を出た後、そのまま学校を裏口から出ると、アシンメトリーの髪型をした若い男が、整った顔を愉快気に歪ませながら手を振っていた。

「よお。調子はどうだい。エリカちゃんよ」

エリカは校内から自分達の姿が見えないように、外の通りに面した扉に背中を

預け、腕を組むと目を瞑った。

「なんのつもり？ 七雄代理人さん」

「堅苦しい呼び方はやめろよ。俺とお前の仲だろ。ベッドの上みたいに名前と呼ぶよ」

彼女ももう慣れているのだろう。そんな軽口にも彼女は動じる様子は無い。

「原田さんに見られる危険は考えないわけ？ あの子、貴方の担当なんだし

よ？」

「だからルリの調子を気に掛けてきたんじゃない。俺って仕事熱心」

「……元気なわけじゃないでしょう。まあ登校してきただけ今まではよりはマシなんでしょうけど」

「一週間くらい引きこもって決断先延ばしにしてたもんな」

「あんな馬鹿げた話、即決で決められる方がおかしいわよ」

「それ、自己批判？」

エリカは舌打ちをすると、組んでいた片腕を上げて蠅を払うような仕草をする。

「それで？ 一体何の用？」

「だから、ルリの様子を見に来たんだって」

「だったら彼女を直接呼び出さない」

「客観的な意見を聞きたかったんだよ。折角おあつらえ向きにクラスメイトに魔法少女が居るんだからな。いくらこの街に魔法少女が生まれやすいっていつても、こんなことは中々無いぜ」

「それなら電話で良いでしょ」

「久しぶりにお前に会いたかったんだよ」

そんな甘い文句と同時に、彼女が背負う壁に手をつき、そして顔を近づけた。

同時にその頬をエリカの手の甲が薙ぎ払うように打つ。ぴしやりと乾いた音が響いた。

「近寄らないで。鳥肌が立つ」

特に表情も変えずにそう口にする。七雄は薄っすら赤く染まる頬を撫でながら、嘆息しながらも笑みを浮かべ、両手を広げた。

「そうか。ルリは元氣無いか。契約して昨日の今日だからな。昨夜は大変だったんだぜ。あいつああ見えて処女でさ。力抜けて言っても全然股開かないの。そんでクンニしまくって腰をがくがくにしてから突っ込んでやったらよ、すぐにあ

ひあひ喘ぎだしてさ。もう笑いそうになっちゃったよ。でもすぐえいイ身体してたから挿入したまんま連続で二回戦。それで昇天させ過ぎたから元氣ねーのかな？ それともあれか？ 誰かさんみたいに、イクの我慢しすぎて失禁する方が体力消耗すんのかな？ その辺どうなん？ 教えてくれよ」

「言いたい事はそれだけ？」

「まあ、とりあえずは」

「なんで貴方みたいな屑が、秩序を守るはずの企業に重宝されてるのか理解出来ない」

「そりやまあ仕事は出来るから、じゃね？」

「貴方がカルマだったら良かったのに、なんて魔法少女の時はいつも思ってた」

「そんな事言うなよ。お前も俺が契約してやったんじゃない。お前も泣いてたよな？ 股から血流しながらさ」

ニヤニヤと笑顔を浮かべながら、再び彼女に顔を近づける。

しかしエリカの表情には最早嫌悪も憎悪も浮かばない。目の前の男が、自分に向けられるそんな感情ですら楽しむような下衆であることを知っているから。その堅固な意志で塗り固められた瞳で七雄をただただ真っ直ぐ見据える。

「残念だけど、あたしバージンがどうとかなんて全然気にしてないから。ただ流石に貴方みたいな層が相手だと、自分の不運を嘆きたくはなるわね」

その口調に虚勢の色は無い。あるのは目の前の男を蔑む冷たい目。

「はっ」

七雄はそんな彼女の一言を愉快気に鼻で笑い飛ばした。

「とにかく、二度とこんな事は止めて」

「わかったわかった。悪かったな」

「あたしが魔女だって原田さんに露見したら、貴方だって色々ややこしいんじゃないの？」

「いや俺は別に。ていうか、お前がそれを嫌がるとは思ってなかったな」

その言葉にエリカの顔に警戒色が浮かぶ。

(……あの事、ばれてる？ ……いや、考えすぎか。例えそうだとしても、あたしのやる事は変わらない)

「クラスメイトともなれば気を使うでしょ。向こうだって勝手に知られたくないだろうし」

「そんなもんかね。でも万が一、ルリが魔女になるような事があればどうせその時わかるじゃん」

「その万が一、ありえるの？」

「お、流石に目敏いな」

昨夜魔法少女として契約したルリを、エリカは今日初めて目にした。

彼女はその目に映る儂げな魔力の色に思わず驚愕した。それほどまでに、今まで見てきた魔法少女、そして魔女を含めても、ルリが放つ魔力の色は飛びぬけて弱々しい。

「いくら万年人手不足だっていっても、あれじゃ企業の方から門前払いのレベルだわな。どちらにせよ浄化は難しいかもな」

「……こんな時でも魔女による保護や協力は厳禁なのね」

「そりゃそうさ。規則は規則だからな」

特にこちらを牽制する様子もなく、平然とそう口にする。

（やはりバレてない？ まあいい。どっちでも一緒のこと）

「そういえば、お前の相方は元気か？　ほら、あのナース姿が似合う地味な子」

「貴方には関係ないでしょ」

「やれやれ。つれないね。おっともうこんな時間か。それじゃな」

「もう二度と来ないで」

「はいはい」

彼女は手を振りながら去っていく七雄の背中を見届けることもせずその場を後にした。

昼休みが終わると、彼女達は体操着に着替え運動場にて体育の授業を受けていた。

日差しもピークを迎えようとする夏休み直前のこの時期に、中距離の記録測定という拷問に近い責め苦を味わう女生徒達の口からは、授業の日程調整を間違っていた体育教師への呪詛の言葉が漏れ続ける。

「マジで死ぬ」

「意味わかんない」

「もうだめ……死にそ」

殆どの生徒は早々に弱音を吐くと、歩行に近い速度でジョギングし出している。

そんな中、二人だけが真剣にトラックを周っている。

一人は背筋を伸ばした綺麗なフォームで、規則正しいリズムで呼吸を繰り返して、ツイントールを揺らす。

もう一人は、まるで千鳥足のようにはろへろになりながらも、その背中についていこうとするルリだった。

「ねえあれ大丈夫かなあ？」

「ルリ、どうしちゃったんだろ。いつもは持久走なんてサボるのに。胸が揺れて痛いって笑って」

その遥か後方で、彼女の後ろ姿を怪訝そうに顔をしかめるルリの友人達。いつもなら自分達と同じように、二言目には「だるい」と顔をしかめて連呼し、さつさと考査を放棄していたであろう友人が、ただでさえ一週間明けに登校してきた、昼休みまで元気が無い姿を見せていたのに、突然のこの奮起ぶりは驚きを通り越して不安にさせた。その姿はどう見ても、自暴自棄になっているようにしか見えない。

実際、ルリは自棄になっていた。憂さ晴らしのように自分の肉体と精神を苛めていた。このまま心臓が止まるまで走り続けてやれば、もうこんな辛い現実と別れを告げることが出来る。そんな悪い冗談が頭にちらつきながらも、やはり脳裏によぎるのは恋人であるカズキの顔だった。彼を守るためには、自分が戦わなければならぬ。

「くそう……くそう……」

ぜえぜえと息を切らしながらもその合間に、まるで泣きそうな声で呟かれるその言葉を、エリカは背中を受け止める。他の生徒なら何事かと思いを掛けに歩み寄るだろう。しかしエリカは軽快な足取りを止めないまま、それでも胸を締め付けられる思いに捉われる。

かつては自分にも、歯を食いしばり、時には枕や指を噛んで、同じように悪態をつきながら涙を堪えていた日々があった。

今すぐ足を止めて振り返り、「実はあたしも魔法少女だったの。あたしだって上手くいったんだから、きっと大丈夫」と声を掛けてやりたい衝動に駆られるがなんとか自重する。

（おそらく彼女は魔女にはならない。なら余計な情報を与えない方が良い。ただ

黙って、やるべき事をやる)

そんな事を考えながら手足を振り続けると、後ろでどさりと音がした。振り向くとルリが倒れている。それを目にしたエリカはすぐさま彼女の元へと踵を返した。

「大丈夫？」

「ああ……うん……」

熱中症の心配もしたが、どうも疲労で転んだだけのようだった。意識などとはしつかりしている。膝を少し擦りむいていた。体育教師が寄ってくる。

「おい大丈夫か？ 保健委員は？」

「今日は休みです。あたしが連れてきます」

有無を言わさぬ口調でそう告げると、エリカは屈みこみルリに肩を貸す形で立ち上がった。ルリは何も言わず、ひよこひよこ片足を引きずりながらも、エリカに身体を半分預けながらも歩き出す。

「お、おい……」

片手を伸ばし彼女達の背後に声を掛ける男性教師の表情は、心配というよりは残念そうな色が見え隠れする。エリカは首だけで振り返り、「大丈夫ですので、

先生は授業の続きをお願いします」とだけ告げた。

「……ありがと委員長」

保健室には担当教諭が不在だった。

ルリは椅子に座らされると、消毒液を探しているエリカの背中にしょんぼりと声を掛けた。

棚を探るエリカの手が一瞬止まるが、「気にしないで」という素っ気無い返事と共に、またがさごそと薬を探し出す。

「あの先生、たまに目がエロいんだよね」

たまにはではなく、貴女を見る男の目はいつもそうよ、とエリカは指摘しそうになったが黙っておいた。エリカの目から見ても、ルリに向けられる男の視線は大抵性的な何かを感じる。勿論それをわかっていたから、彼女は自らこうして介抱を願いだしたのだ。

もし体育教師が女性だったら、もし保健委員が休みじゃなかったら、自分はこんな事をしなかっただろうと確信している。そこまでお節介ではない。やるべき人がいるならその人に任す。何でも自分でやれるなどとは思っていないし、やり

たいとも思わない。

エリカは自分が全能の正義の味方ではないし、完全無欠の優等生でもない事を弁えている。

ただ自分がやれる事で、やるべき事があるならやる。それだけの事なのだ。だから彼女は昔から友達が少ない。

仲良くしなければならぬのならするし、その必要が無いのならしない。そんな独特の価値感を物心がつく前から形成していた。

「折角もうすぐでゴールだったのにね」

エリカが絆創膏と消毒液を手に取って振り返ると、ルリはそう言うてはにかんだ。

しかしその微笑みはまだどこか虚ろげだ。

「また走り直せばいいだけじゃない」

そう言うてエリカは屈みこむ。

「いいよ。自分でするって」

「そう？ はい」

今度は立ち上がり、ルリに絆創膏と消毒液を手渡した。ルリは両手のそれを眺

めると、くすりと表情を和らげた。エリカは不思議そうに小首を傾げる。

「なんか、委員長長って変わってるね」

「そんな事無いと思うけど」

「変わってるよ。だってこういう時は、『いいから。あたしがするから座って』って言うところだしよ普通。委員長のキャラならさ」

「自分でするって言ったから」

「そりゃそうだけど」

ルリは笑いながら自分で手当てを始める。

「おーいてて。あーあ。慣れないことはするもんじゃないね」

唇を尖らせながら、消毒液を膝に塗るルリを、エリカは少し離れたところから黙って見下ろす。

不意に二人の視線が合った。

「委員長長って、いつも腕組んでるよね」

「癖なの」

「ふーん……ねえ委員長長ってさ、遠距離恋愛してるって本当？」

「ええ」

「そこは少し照れながら『あ、貴女には関係ないでしょ』ってうろたえるところじゃない？ 折角ツインテールで委員長なんだから」

「何それ？」

「あはは。なんでもない」

会話が途切れる。

ぴりぴりと絆創膏の包装シールが剥がれる音が響くと、「……寂しくならない？」とルリは無表情で尋ねた。

「なるけど」

「枕に顔押し付けて『会いたいよお』って足ばたばたさせたりすんの？」

「するけど」

「……即答なんすね」

全く照れる様子もなく回答を繰り返すエリカにルリが苦笑いを浮かべる
「原田さんが聞いたんじゃない」

エリカがむしろ不思議そうに肩を竦めると、ルリは白い歯を覗かせた。

「そうでしたね……っと。いたた」

「無理しないほうが良いわよ。それに今日体調悪いんでしょ？ このまま寝てい

「つたら？」

「そうしましょうかね」

ベッドに横たわるルリにエリカが布団を持ち上げると、ルリは猫のように目を丸くしてエリカを見上げる。

「何？」

「思いがけない優しさにびっくり」

「こうしないと駄目なんでしょ？ あたしのキャラ的に」

「はは。そうそう。委員長キャラはツンデレじゃないと」

「さつきから何を言っているのかよくわからないけれど、休むなら休む。元氣なら無理矢理にでも一緒に戻ってもらうけど？」

「あーごほんごほん。こりや重症だわ。十字靱帯いっちゃってるわ」

本気でそうしかねないと思わせる口調に、ルリは慌てて布団を被る。飄々とした振る舞いを演じようとはしているものの、その口調からは強がりか隠しきれず、どこか空々しい。

「それじゃ、あたし戻るから」

「うん。ありがとね。委員長」

ベッドから離れ、ドアノブに手を掛けると、布団の下からくぐもった声がエリカの背中に届く。

「あのさ……変なこと聞いて良い？」

「何？」

「委員長の初めての人って、今の彼氏？」

ドアノブを掴んだ手に緊張が走る。

「……違うわ」

「……そうなんだ」

普段なら一笑に伏して無視をするような愚問だ。あまりにもプライベートに押し入った、不躰で無礼な問い掛け。

ルリにしても普段ならばそんな質問、たとえ気心が知れた友人にすらしないだろう。

しかしエリカは彼女が如何に狼狽し、混乱の最中にいるかを知っているが故に真摯に答えた。

自分が置かれている異常な状況に対して、他人の普遍的な経験を知りたくなるその気持ちも、やはり身に覚えがあった。

「全然好きでもなんでもない人だった」

たとえ同じ境遇に身を置いているクラスメイトとはいえ、ルリに対して必要以上に義務感を背負う必要は無い。聞かれてもいないことを教える必要も無い。そう思いながらも、エリカはルリに対して赤裸々に語った。

こんな傷の舐めあいは気休めにしかならない。しかしその気休めで、どれだけ楽になるかを知っているから。愛する人を守る為に行った行為なのに、まるで自分が罪人のように思えてならなかったあの頃が、エリカの脳裏にフラッシュバックする。

「……そうなんだ。意外」

「若気の至りよ。皆そんなものじゃないの？」

「後悔、してない？」

エリカは鼻で笑う。

「全然。あんなのただの通過儀礼じゃない。重要なのは、誰と最後まで一緒に居るかでしょ？ それに比べたら初めての男なんて何の価値も無いわ」

エリカのその言葉は紛うことなき本音。しかし……。

「……そう、なのかな？」

「そうよ」

強く、そして慈愛も感じる口調でそう念押しする。

「……そっか……うん。ありがと。ごめん、変な事聞いて」

「お大事に」

扉を開けて保健室を出ると、閉めた扉のドアノブを後ろ手で握ったまま、しばらくその場で立ち尽くす。

先ほどの言葉は虚勢なき本音。破瓜の血など刻印でも何でもない。汚されたとも思っていない。ただ、彼氏に対しては、申し訳ないという慙愧の念に捉われ続けていた。

きつとルリも、今同じ気持ちに苛まれているのだろうとエリカは瞼に影を落とした。

扉の向こうからは、鼻を吸る音が微かに漏れ聞こえてくる。

ルリの寶石のような瞳から、堪えきれずに流れる涙が容易に想像出来た。暖かい布団に包まれ、張っていた気が緩んだのかもしれない。

同情はしない。

エリカは足を進めた。

そればかりは、自分で乗り越えるしかないのだ。

鏡の中の自分を覗き込む。

ふむ。悪くない。

ちよつとポーズなんかを取ってみる。

おお。

良いじゃない。可愛い可愛い。

やたらとゴシック調の花が目立つけど、そこがまた魔法少女然とした雰囲気醸し出しているんじゃないでしょうか。

「なんだよやけにご機嫌じゃねーか」

「ちよつと黙ってて」

ベッドで寝ている私の身体の横には七雄が腰を掛けている。あまり近寄らないでほしいけど、魂が抜けた私の身体を守るといいうのもこいつの仕事らしいので仕方が無い。

鏡の前で次々とポーズを決めていく。あ、格好良い……けど、これプロキュアじゃん。パクリは駄目だよ。オリジナリティを大切にしないと。お、これなんてファンキーで良いんじゃない？ でもどっかで見たことあるポージングだな。

「それ牛乳特選隊じゃねーか」

あ、そうだ。くそう。独創的って難しい。

「昨日までの凹み具合が嘘のようだな」

そう笑いながら七雄はゲーム機の電源を入れる。

「ちよつと何してんの？」

「いいだろ別に。待ってる間暇なんだから」

「ていうか別に要らないし。身体の警護とか」

「まあそういうなよ。俺ドラクリって6以降しかやったことないんだよな」

「それでも日本男児か」

楽しそうにコントローラーを握る七雄を見ると怒る気が失せる。

まあ確かに身体を放っておいて出歩くのはなんだか気が引けるし、ゲームに集中してもらっておいたほうが悪戯とかされるよりはマシか。

頬を両手で叩いて気合を入れる。

「よっしやあ！」

「で？ 何かあったんか？ やけにやる気になってるみたいけど」

「ていうか諦めただけ。やるしかないんだなって」

「ふうん」

「走りまくって泣きまくったら、ちよつとはすっきりしたし。それに……」

「それに？」

「何でもない」

ツンデレツインテール委員長にも励まされたしき。いつまでもくよくよしてらんないっしょ。

凹むだけ凹んだし、そろそろ現代っ子らしくドライにいくとしますか。でも前から思ってたけど、委員長って変な子だなって思う。確かに真面目で融通きかないし、クラスでも浮いちゃってるよね。でもそういうところ、私嫌いじゃなかったりするんだ。誰の目を伺うでもなく、我が道をいくって感じで。

そういえばあの名作ミステリーホラーをアニメ化した「アナター」の青沢さんに似てる。

ああいう子がもし魔法少女だったら、きつとすごく強いんだろうな。ゲームと

かなら最後の最後まで仲間にならないタイプだね。うん、間違いない。

余計な事を考えていると気が楽だ。

威勢よく窓の外に出る。

昨晩は初体験が衝撃的すぎて変身……じゃないや、解脱っていうんだっけ？

とにかく魔法少女の姿になったのはこれが初めて。

目に写る光景が、ああ、あたし本当に日常から逸脱しちゃったんだなって嫌でも痛感させられる。

なにこの空。どこかで山火事にでもなってるみたい。それでいて月は青い。生理的に受け入れられない気味の悪さがある。

無理矢理つけた勢いが削がれる。端的に言うと、びびってしまふ。振り返り、コントローラーを手にTVを凝視してる七雄に声を掛けた。

「ね、ねえ？ そのカルマとかいう化け物は何処にいの？」

「わかんね」

「は？」

「確実なのはお前の彼氏の近くで待ち構えてればいつかは来る。でもあんまりお奨めしねーな。お前弱いんだから、こっちから打って出て不意打ちとかしねーと

勝ち目薄いぞ」

その言葉に目を見開く。

「え？ 私弱いのか？」

「そりゃもう」

「十年に一人の逸材とかじゃなくて？」

「全然」

「マジで？」

「マジ」

てつきり選ばれた存在だと勝手に思っていた。だってこういうのって、大抵そうじゃない？ 初めっからチート級だったりするもんじゃん。そうじゃないと今時売れないし。やはり現実はラノベアニメのように甘くはないようだ。

とぼとぼと夜の街を歩く。

そうか。私、弱いのか。

その事実を飲み込み始めると、ふつふつと再び不安が顔を出す。

大丈夫……なのかな？

いやいや。もうグダグダ考えるのはよそう。それはこの一週間でもう飽きた。

とりあえず、やるしかないって結論出したじゃん。

気分を切り替えるように顔を上げると、半透明ですれ違っただけでいく人々を観察する。ついついいつもの癖で身体を左右に避けてしまうが、一度意を決して避けずにすれ違う。人々がまるでホログラムのように私の身体を通り過ぎていく。なんだか気持ち悪い。でも無機物は触ることが出来る。そりゃそうだ。そうじゃなかったら床を踏めなくて真つ逆さまだし。

有機物というか、生命が宿るものには干渉が出来ない、という説明は受けていた。でも無機物であるゴミ箱の蓋は、こうして開けることが出来る。その場合も、現実のゴミ箱の蓋は動かさず、蓋の霊体だけが持ち上がる。じゃあ霊体が元の位置にない蓋はどういう状態なんだろうか。というか、無機物にも霊体があるっていうのがいまいちよくわからない。不安や恐怖をやり過ぎるために、そんなわけのわからない事を考えていると、ふと背筋に冷たいものが通った。

顔を上げてきよるきよると見渡す。

すぐに『それ』は視界に入った。

「まさか……カルマってあれ？」

思わず声が出る。

ただでさえ生理的嫌悪感を催す風景に、眩暈を促すほどの非日常的な存在がそこに居た。

夜の街のスクランブル交差点の脇。

仕事帰りのサラリーマンや若いカップルのすぐ傍に、当然のように佇んでいるのは熊。

背丈は三mはあるだろうか。

あまりの現実感の無さに着ぐるみにしか思えない。でもよくよく目を凝らしてみると、その身体の周辺にはうっすらと黒い霧のようなものを纏っている。

目が合う。

こいつと戦わないといけないの？

え？ マジで？

普通に怖いんですけど。

逃げたい。

無理だつて。

私普通の女子校生だし。

熊なんて勝てるわけないし。

足が竦んで動かない。

熊のカルマはそんな私から興味無さそうに視線を逸らすと、そのまま二足歩行のままのしのと離れていった。

安堵の溜息を吐き、その場にへたれ込む。背中が冷たい。動悸も酷いし身体中が震えている。

戦う？

あんなのと？

私が？

いざ目の前にすると、信じられない。

冗談でしょ？

頭では理解していたはずなのに、いざその脅威を目の前にすると、とてもじゃないが、怪物と戦う自分なんて想像だにできない。

本当に、そんな事出来るの？

やってる子が他にもいるの？

そっと右手を上げる。

教えられてもないのに、その言葉は勝手に口から出た。

「※※※※」

すると眩い光と共に、チャッカマンが顕現する。

今度は左手に視線をやる。

「※※※※」

これは……花火？

こんなので戦えって？

「……はは、は」

乾いた笑い声しか出ない。

コンビニで売ってるようなチャッカマンと花火で戦うの？

「……やられたら、私も、死ぬんだよね？」

死。

その現実が目の前にある。

ただでさえ冷や水をぶっ掛けられたような背中が、さらに凍りついたかのように

冷たさを増す。

「……勘弁してよ」

こちらら処女奪われたショックからようやく立ち直ったばかりだったのに。

熊が向かった先は、カズキが住むマンションの方角と一致する。今はまだ幸いにもカズキ本人に影響は出ていないらしいけど、このまま放置していたら、いつかカズキも命の危険に晒されるらしい。

「……どうしよう」

額を手の平で抑える。歯が勝手にカチカチと音を鳴らした。どうしようもへつたくれもない。頼れる仲間も友達も居ない。

私がやるしか……ないんだ。

生まれたての子鹿のように膝を笑わせながら立ち上がる。

そして、走り出した。

なるべく何も考えないように、ひたすら走る。

何か考えると、足が震えて立ち止まりそうになるから。

私が立ち止まったら、誰もカズキを助けられなくなるから。

怖くておしっこちびりそうになっちゃうから、だから、何も考えずに、ただひたすら熊の背中向けて走った。

身体が軽い。足で走ってるのに、流れる風景はまるで車の助手席から見ているような疾走感。すごい。

これが魔法少女の力？

これならいける？

県道脇の歩道をのしのしと歩くカルマの背中が再び見える。

地面を蹴りながら花火の導火線に火を着けた。

あと数m。

カルマは私に気付いていない。

いや、気付いているけど、私を相手にするつもりが無いのか。

どちらにせよ、振り向く素振りは見せない。

どっちでも良い。

このまま後ろから突っ込んでやる。

左手に持つ花火が勢い良く火花を散らし始めた。まるで溶接工が持つバーナー

のよう。轟々と音を立てて舞い上がる火の粉は、鉄をも溶かす火力を容易に想像させる。

熊の毛深い背中はまだもう目前。

不安と恐怖が、尋常ならざる身体能力による万能感と相まって、鼓動の速度を駆り立てる。

意識は鮮明。でもどこか現実感希薄。集中しているのか、していないのか。それすらもわからない。

世界はスローモーションカメラで映し出されているかのようにゆっくりと回る。

熱に浮かされたような高揚感の中、そういえば、技の名前とか決めてない。などと悠長な事を考える始末。

舞い散る火花を剣に見立て、斬りつけるように、真横から熊の背中を薙ぎ払った。

じゅう、と肉が焼ける音を伴い、茶色の毛に覆われた背中が、真一文字に焦げていく。

熊は背中を海老反ると同時に、悲痛な鳴き声を上げた。

傷は……浅い。致命傷には程遠いことを瞬時に理解。

唸り声を上げながら、鬼のような形相で振り返る熊に対して、両手を前に突き出す。

「ちよ、タンマタンマ！ 落ち着こう！ 話せばわかる！」

先ほどまでの威勢はどこへ行ったのか。一瞬でへたれる私。同調するように花

火の勢いも萎れていく。

「熊はもう一度その怒りを表明するように、顎を上げるとびりびりと空気を振動させるほどの唸り声を上げた。」

はい。

もう無理。

降参降参。

頑張った。

私頑張ったよ。

だってさ、花火片手に熊に真剣勝負挑む女子校生なんて普通居る？

居ないっしょ。

踵を返そうとする身体が一瞬硬直する。

……じゃあ、カズキはどうなの？

でも目の前の脅威はともも自分じゃ太刀打ちできそうにない。

いや、これでいいんだ。

「戦略的撤退！」

今すぐこいつを倒す必要は無い。とりあえずはカズキに近寄らせなければ良

い。

私を追ってこい。

熊に背中を向けて全速で逃走。

夜の街を駆ける。

背後からはどすどすと四脚で地面を踏み鳴らす音。

胃がせり上がりそうなほどの威圧感。時折振り返ると、涎を撒き散らしながら追ってくる獣の姿が目に見える。

「ひいっ！」

TVで見る短距離ランナーのように、両手両脚を振り上げて必死に逃走。

「無理無理無理無理！」

あんなの勝てるわけない。向こうも速いがこっちも速い。差は縮まらないが離れもしない。

どれだけ走っただろうか。

もう後ろを振り向かず、とにかく無我夢中で街の中を走り続けた。

何度もジグザグに曲がり角を駆け抜けると、いつの間にか背後からは足音が聞こえなくなっていることに気付く。

息も絶え絶えに恐る恐る振り返ると、自分を追ってくる獣の姿は無い。

周りを見渡すと、見慣れない大きな公園が目についた。看板に描かれた名称から察するに、いつの間にか隣街まで走ってきたようだ。

「今日は……はあ、ひい……よく走る日だなあ……」

肩で息をしながら苦笑いを浮かべる。

一先ず安堵。

しかしすぐにカズキへ想いを馳せる。

途中で撒いたのはいいが、その後再びカズキの下へ戻っていったのではないかという最悪の事態を想定。

再び足を進めようとする、が、数歩で力無く止まる。

疲労？

いや違う。

またあいつと相対して、どうしたら良いのかわからない。とても勝てそうにない。

……でも、行くしかない。戦うしかないんだ。私がやるしか……。そう自分に言い聞かせ、肩を落としながらとぼとぼと歩き、そして徐々に足の回転数を上げ

ていく。

時間は数分遡る。

隣街まで着いてきた熊のカルマは執拗にルリの背中を追っていた。

魔力の火花によって彼の背中に刻み込まれた激痛は、本来の狩りを忘れさせるには十分すぎるほどの屈辱だった。

まずは目の前の美味しそうな雌を犯し、そして餌を喰らいに行く。そんな予定が煮えたぎる彼の意識とも言えない本能の中で組み込まれた。

角を曲がる雌を目で追う。自身の身体もそちらへと向けた。その瞬間、背中に
衝撃。

軽い。

しかし無視出来るほどではない。

自らの背中を振り返る。

追っている雌に負けず劣らず美味しそうな雌が、自分の背中に両膝を曲げて飛

び乗っていた。

ミニスカートから覗く健康的な脚線美の間から、純白の下着が彼の目に映る。

「止まりなさい。速度違反よ」

ツインテールを揺らしながら、その少女は右手に小さな紙片を握り締め、そしてそれを熊の背中に貼り付けた。すると途端にがくと身体を揺らすほどに急激に減速を強いられた。

同時に女は自ら毛むくじやらの背中から、身を翻すように飛び降りて華麗に着地。

熊は慣性に抗いきれず、地面に転がり回ったが、野生の俊敏性を活かして瞬時に立ち上がる。

目の前には先程まで自身の背中に乗っていた少女が仁王立ちで構えていた。

彼に知識や知性といった類のものがあれば、その女が着ている制服が正義と秩序を司る象徴だとすぐにわかっただろう。

しかし理外の存在である彼にとってはあまりに関係の無い話。権威溢れる衣服など我知らずと、柔肌ごと引き裂こうと両前足を立ち上げる。

その刹那、何かがかちりと音を立てた。

右前足に違和感。

視線を向けると、鉄の光沢を輝かせる輪っかが、手首を締め付けるように拘束していた。その輪っかと鎖で繋がっているもう片方の輪っかを、少女は自らの手首に嵌める。

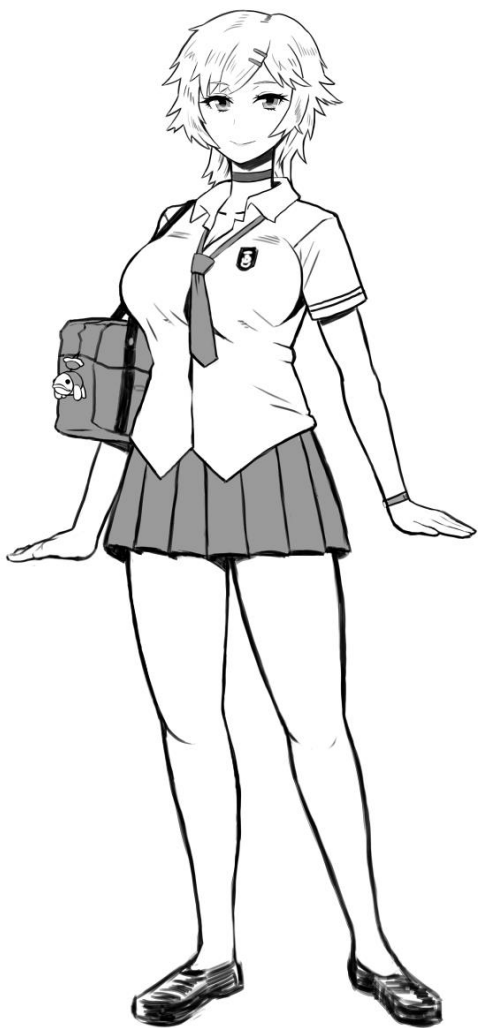
「確保」

その瞬間、巨大な体軀を支える両膝が笑い出すように震えると、やがて身体全体の自由を失い、鈍い音を立てて身体ごと地面に伏す。

理解不能な状況に陥りつつも、それでも何とか緩慢な動きではあるが、四肢をもがらせる。

「無駄な抵抗は止めなさい」

腰を下ろし、熊の後頭部を手で押さえつけながら、エリカは淡々とそう口にした。



ステータス表

原田ルリ

年齢…S商二年生

身長…160cm

体重…49kg

3サイズ…90(F)、61、88

レベル…1 NEW

属性…火

得物…ヒノカグチツと名付けられたチャッカマン及び後述の花火。

装甲…とどころどころにゴシック調の花の装飾がされたブラウスにプリーツスカート。

趣味…隠れオタク。

好きなアニメ…ジャンルを問わずオリジナル作品を好む。

容姿…（本来ならば）S

ただ顔の造形が整っている、という領域を超えた、理屈では説明できない神秘的な魅力を先天的に纏っている。

母性を体現化した身体つきは、雄の繁殖本能を激しく呼び起こさせる。

よほど特殊な嗜好を持つ異性以外に対しては、まるで呪いと表現しても差し支えないほどに強制的に魅了する。

時代が時代なら、国政に影響を及ぼすほどの美貌。

しかし彼女本人が自身の魅力に対してあまりに無頓着なために、実際には一ランク下のAに相当する。

特殊技能

火花を散らすタイプの玩具火花…E

鉄を溶かす程度の火力。リーチが短い上に発動まで数秒掛かる。持続時間も数秒。

基本性能

魔力容量…C。特筆すべき点は無い。

霊体耐久力…D。やや低い为数発の攻撃には耐えられる。

攻撃性能…E。発動までのタイムラグがある上に、威力、範囲共に凡庸。

防御性能…E。武道等の経験が皆無の彼女は、相手の攻撃に対して有効な防御手段を有しない。

素早さ…E。全ての陸上競技で記録を塗り替えられる程度。

備考…

雑魚カルマは基本性能が平均D～E。最終目標である牛頭馬頭で平均C。

あくまで平均なので、熊タイプは耐久力と攻撃性能が高く、他が低い数値となっている。

『企業』史で最も初期ステータスが低い魔法少女。

手錠で繋がれたカルマは、すっかりと筋肉が弛緩してしまったようであつ伏せに倒れている。エリカはその後頭部に膝を乗せて、その巨大な身体を地面に押し付けるように固定した。

「ナオ。お願い」

「う、うん……」

物陰からもう一人、不安気に眉を落とした魔女が現れる。

純白のナース服がよく似合う、気弱ではあるが深い慈しみを感じさせる顔立ちの少女が、自身無さげな足取りでエリカの隣へと近付いた。

その目は開いているかどうかすら定かではないがまつ毛が濃く、頬にはうっすらそばかすが残っている。しかしその純朴な容姿とはミスマツチなほどに、スカートのはエリカと同様、健康的な太ももを大胆に露出していた。下着など見られようとも構わないといった風情で堂々と立ち振る舞うエリカとは対照的に、ナオと呼ばれた少女は、恥ずかしそうに裾を下に引っ張りながら歩く。そんな無垢な印象を与える外見や振る舞いとはやはり対照的に、ナオの太ももからは黒いガーターベルトが覗き見えていた。胸の膨らみも服の上から十分に確認できるほど豊か他だった。

そんなことなくアンバランスな可憐さと色気を漂わす少女が、エリカに取り押えられたカルマの横に立った。

「※※※※」

呪文を詠唱した彼女の細々とした両腕に抱えられたのは、まるでバズーカ砲を連想させる巨大な注射器。

「よい、しよ……つと」

指ほどの太さがありそうな巨大な針が、ぐざりと音を立ててカルマの臀部を突き刺す。

「どうしていつもそこを刺すの？」

カルマを拘束したままエリカはそう尋ねた。

「どうせなら、痛くないほうがいいかなって」

「痛くてもいいでしょ」

「わざわざ苦しめる必要もないじゃない」

その返答を聞いたエリカは小さく溜息をついた。ナオは弁解するように、穏やかな苦笑いを浮かべて口を開く。

「野生の動物にも言えるけど、彼らに罪は無いでしょ？」

「でも人間社会にとつて有害なら駆除はしないといけない」

「それはわかつてるけど……」

しゅんと肩を落としながらも、ゆつくりと注射器を引いていく。

エリカは注射器に溜まっていく青い血を見つめながら、「ナオは優しすぎる」と呟いた。

「そんな事無いよ」

「その優しさがいつか命取りになりそうであたしは怖いの」

ナオは答えない。ただ優しげな口元に苦笑いを浮かべるだけ。黒いセミロングの髪が風に揺れるのを見つめながらエリカが訥々と口を開いた。

「ナオに何かあったら、悲しむ人がいる」

エリカの鋭い視線が、温和そうなナオの目を真正面から捉える。

ナオはやはり穏やかに口元を緩め、「わかつてる。何も自分や仲間を犠牲にしてまで、相手を気遣ったりするわけじゃないし」と口にした。

その言葉を受けて、エリカは微かに首を横に振った。

「やっぱりナオは魔女になるべきじゃなかった」

一体どれほどの血液を抜き取ったのだろうか。

押子を引ききった注射器をカルマから抜くと、再び呪文を詠唱してその血液ごと消失させた。

そして両手をばんばんと軽くはたくと、その気弱そうな外見からは意外なほどに、強い意志を感じさせる口調で言葉を紡ぐ。

「危なつかしくて、エリカを一人になんか出来ないよ」

そう微笑むナオから、エリカは頭を掻きながら視線を逸らし呟いた。

「……頑固なんだから」

「エリカほどじゃないよ」

エリカは「ふん」と鼻を鳴らすと手の平で、体温を調べるような手つきでカルマの表面を撫でると手錠を外した。

カルマはすぐに立ち上がるが、その足取りはおぼつかない。エリカとナオに対して申し訳程度に唸り声を上げる。しかしそれはどこか命乞いをしているかのようには弱々しい。数歩後ずさると、そのまま二人に背中を向けて逃げていく。

その背中を心配そうに見届けながらナオが口を開いた。

「あれだけ弱らせたなら流石に大丈夫だよね？」

「そうね。あたしの切符も貼ったままだし」

「でも……いいのかな？　こんな事勝手にやってて」

「禁止されてるのは魔女が魔法少女の代わりにカルマを倒すこと、でしょ」

「でも、出来る限り手助けもしたらいけない、とも聞いたよ？　ちゃんと魔法少女が倒さないと、結局カルマ憑きの男性の因果律が狂うって」

「あたしとナオみたいに魔法少女同士で助け合うのは問題無かったのにな？」

「それは……えっと……そうだ。魔法少女と魔女は別モノだからでしょ？」

ナオのその言葉が正しいことはエリカもわかっていた。

魔法少女はカルマ憑きの男性と縁が結びついているからこそ成れる存在。

対して魔女は、言うなればただの魔術師だ。

魔法少女を辞めた後でも、魔力の回路が開いたままだからそのまま魔術師になれるというだけのこと。

縁が結びついた魔法少女がカルマを倒すことによつて浄化が完了する。

だから魔女は手助け出来ない。

一見何の矛盾も無い。

縁が直接結びついていないわけではないが、成り立ちとしては同じ存在である他の魔法少女がカルマを倒すのは問題無い。

その理屈も、諸手を挙げて納得できるわけではないが、そういうものだと
言われると反論出来るほどの知識が無い。

(それでも、何かが引っかかる)

エリカは苛ただしげに親指の爪を噛んだ。どんな悪法であろうと規則は規則。
彼女の信条からすれば、それは絶対遵守しなければならないもの。

それでも彼女は、企業にも黙り、魔法少女を手助けすることを止められない。

エリカは推測する。

魔術師になるには相応の努力か素養が必要になる。そしてその数は常に不足し
ている。

結果的に魔法少女は、いわば飛び級で魔術師を作り出す事が出来る。

そしてその魔法少女としての戦いには、魔術師である魔女は手助けしてはいけ
ない。

(これじゃまるで……選抜試験じゃない)

なんの根拠も無い憶測だが、そう考えると合点がいくのも確か。手錠の鎖が彼
女の手の中で、苛ただしげに金属音を奏でた。

土地勘の無い隣街。簡素な住宅街の中を四苦八苦しながら方角を見定めながら走る。滅茶苦茶に走り続けていたから自分がどの辺りにいるかのすらよくわからない。とりあえず駅前に出て、カズキが住むマンションへ向かおうと思った。私に撒かれたあの熊が行くとしたらそこしかない。

しかし足は思うように進まない。なんとか走行の体裁を整えるだけで精一杯。

「プレッシャーが背中に押し掛かる。

どうしたらいい？

真っ向から立ち向かって勝てるとは思えない。他に何か武器は出ないのだろうか。走りながら呪文を唱えてみる。

線香花火が出た。

「アホか！」

立ち止まり、それを地面に叩きつける。こんなんじやカズキを守れない。自分のしよぼさに腹が立つ。

扉に手をつけて大きく息を吐いた。辺りはしんと静まり返っている。それが却

って私の不安や焦燥感を煽った。

必死に気合を入れ続けないと、ついつい逃げ出したいという気持ち湧き起りそうになる。そんな自分に対してより一層怒りを覚えるけど、かといって現状を打破する策は思いつかない。

一回帰って、七雄に助言を乞おうか。

そうだ。一人じゃないんだ。

この際わがままは言わない。あんな奴でも仲間というのは心強く感じる。一縷の望みが見つかったような気がした。拳を強く握り締める。

よし。そうと決まれば早速……。

意を決して再び足を前に進めた私の耳に、不吉な音が聞こえる。

つい先ほどまで私を追い掛け回していた獣の足による、アスファルトを踏み鳴らす特有の音が、曲がり角の奥から近づいてきた。

反射的に身を翻し、電柱の影に隠れる。息を殺し、漏れ出そうな叫び声をなんとか喉の奥へと押し込んだ。一瞬で身体は冷や汗で包まれる。鼓動が五月蠅い。

これで気付かれるんじゃないかって心配になるくらいドキドキと響く。

膝ががくがくと震える。

駄目だ。やっぱり怖いよ。こんなの無理だよ。

ひた、ひた、と足音が私が進もうとしていた先の交差点を横切っていった。その後ろ姿を電柱からそっと顔を出して覗き見る。どういいうわけか足取りがおぼつかない様子。時折聞こえる唸り声も、なんだか水をかけられた犬のようで悲壮感すら漂う。弱っているのは明白だ。

……。

もしかして、スタミナ切れとか？ 走り回ったの無駄じゃなかった？

どうしよう。

明らかにチャンス……だよね。

ほら、よろついでるもん。

でも……それでも怖いものは怖い。

膝は相変わらずかくかくと笑っている。

もう家に帰ろうって、全身の細胞が訴えかけてくる。

……うん。

ごめん。

それ、却下。

もうちょっとだけでいいからさ、付き合ってよ私の身体。

だつてさ、どうしてもカズキを助けたいんだもん。

駄目だったらまた逃げれば良い。何度だつて不意打ちしてやるんだから。

昔からずっと好きで、ようやく付き合えたんだから、これからずっとずっとイチャイチャしたいじゃん。

大体あの馬鹿、私が告白するまで全然気付いてなかったっぽいし。

なんか思い出したら腹たつてきた。

明日バイト先に抜き打ちで押しかけてやろう。それで頭撫でてもらうんだ。よし。気合十分。

「※※※※」

ぼそりと呪文を呟く。右手にチャッカマンと左手にはまた玩具花火。

しかし今度は二本出す。

一本目に点火すると同時に、ゆっくりと足音を立てないように忍び足で、しかし迅速にカルマの背中へ近づく。

花火が点火する。

音か魔力に反応したのか、とにかくカルマが振り返った。二本足で立ち上が

る。こつちも同時に二本目にも火を着けた。チャツカマンを消して、二本目を右手に持ち替える。今度は二刀流だ。

カルマと視線が合う。その眼光はやはりどこか弱々しい。私を襲うという気概が感じられない。怯むように一步下がるその巨体に対し、大きく一步踏み込みながら、火の粉を振り掛けるように、左手に持つ一本目で肩から腰にかけて袈裟斬り。

「グガアッ」

顔を歪ませて叫ぶ。

痛めつけられてむこうも開き直ったのか、上半身を前に屈めて突進してきた。

ほぼ同時に右手に持っていた二本目が時間差で点火。突っ込んでくる顔面目掛けて、シャワーのように飛び散る火の粉の塊を突き出した。

しかし向こうもまさに必死。狩りの成否は生き死に関わる。それはお互い同条件。私の火花など気にしないとばかりに、鼻先を高熱で焦がしながらも私の両肩に前足を掛けた。

そのまま体重を掛けられるといとも簡単に地面に押し倒された。

巨体に押し掛かれる。しかし怯まない。ここまできたら怯えてる暇なんてな

い。こつちだって、遊びでやってるわけじゃないんだから！

右手の花火を顔面に押し付けながら、左手のものも同様に鼻先に押し付ける。向こうは向こうでぐいぐいと肩に爪を立ててきている。

肉を削ぎのけて直接骨を掴まれてるのだから痛い。苦痛に顔を歪ませる。泣きたい。逃げ出したい。まさに身を引き裂かれる思い。

でも、今はそれどころじゃない。やらなきゃ、やられる。弱味を見せる暇はない。歯を食いしばり、目の前の怪物を睨みつける。

威嚇のためか、それとも苦痛に耐えかねたのか、それともドメとばかりに私の首筋を噛もうとしたのか。ともかくカルマは大きく口を開けて一瞬首を仰け反らせた。私は両手に持った花火を、その口の中に押し付ける。空气中に炸裂しつづける火花がすっぽりとその中へと入った。獐猛な牙が見え隠れするその口から、青白い光がぱちぱちと音を立てて煌いているのが覗き見える。お互い声にならない苦悶が滲む雄たけびを上げ続ける。それはもはや我慢比べの様相を呈していた。

きつとあんたも生きる為に必死なんだろうね。まさに目の、涎と血を撒き散らす獣に対して、同情とも共感とも言えない不思議な感覚を覚える。

でも、私にだって、負けられない理由がある。

守りたい人がいる。

本当なら多分もう、気絶しそうなくらい痛い。でも決死の覚悟によるアドレナリン分泌のおかげか、私は強情なまでに花火を離さない。

口元からだけでなく、カルマの耳と目からも焦げ臭い匂いと共に煙が漏れていく。

「うううううああああっ！！！」

こんな叫んだの、多分赤ちゃんの時以来。閑静な夜更けの住宅街に、魔法少女として生まれ変わった私の咆哮がこだました。

どさりと音を立てて、毛むくらじやらの巨体が地面に伏す。私は息を荒げながらもゆっくりと立ち上がり、その背中を見下ろした。勝利による歓喜なんて無い。なんだか虚しい。でも、大好きな彼氏を他の誰でもない、私の手で守れたことは身震いするほどの達成感に包まれた。それが自分だけに与えられた使命なのが誇らしい。

ほっと一息。

倒れたカルマに背を向けて歩き出す。家に帰ろう。そしてすぐにカズキに電話

しよう。あの馬鹿の声を聞いて、それで何のとりとめもないお喋りをして、そのまま寝落ち。なんて幸せなで、ありきたりな日常。それを守るためなら、まあ、魔法少女も悪くないかな。

ぼろぼろになった装甲の隙間から見える数え切れない擦過傷を、苦笑いで眺めながらそう思う。特に両肩からはだらだらと血が流れ落ちていた。実体に戻れば治療とかは必要無いらしいが気分の良いものではない。さっさと身体に戻ろう。

よたよたと足を進める。その瞬間、背後から何かが聞こえた。

……嘘でしょ？

一度生唾を飲み込み、そしてゆっくりと振り返る。カルマが、再び四本足で立ち上がっていた。その意識は明らかに朦朧としている。視線は私を捉え切れていない。身体はふらふらと揺れている。それでも顎を上げて、いまだ煙が籠もる口で咆哮を上げた。

……ああ。

今度こそ、もう無理だ。腕は上がらない。魔力も底を尽いたのがわかる。走って逃げることにすら叶わないだろう。

涙が零れる。

ごめん。

カルマが一步こつちへ近づく。

ごめんねカズキ。

さらにもう一步。

守れそうにない。

もう目の前。

つんざくような唸り声が耳を突く。

びくりと身体を縮こませた。

痛いのはやだな。でもカズキに会えないのはもつと嫌だ。カズキを守れなかったのはもつともつと嫌だ。でももう、指先一つ動かせないよ。

背骨の芯まで震わす獣の雄叫び。その暴虐な空気の振動は、満身創痕の私に全てを諦めさせるには十分だった。

目を瞑る。

瞼の裏で、カズキとの思い出が走馬灯のように駆け巡る。

花火を見ながら告白したあの日のこと。

やだな。

まだ二人でしたいこと一杯あったのにな。

もつと素直に、好きって言いたかった。

こんな事なら、カズキに最初をあげたかった。

次々と消えては浮かぶ後悔。

カルマはまだ唸り声を上げてる。

もういいよ。

そんな怖がらせないでよ。

……あれ？

なんだろうこの違和感。

そうだ。

これ、唸り声とはまた違う音だ。

それに、遠くから聞こえる。

右耳が捉えたその音は唸り声と重なり、そして掻き消すように段々大きくなっ

ていく。

なにこれ？

何かのエンジン音？

恐る恐る目を開く。

同時に高速で近づいてくる音の波の大きさが最高潮に達した。

カルマの咆哮とはまた違う、大気を切り裂く爆音。

「はっはっー！」

その轟音に負けず劣らずよく通る乾いた笑い声がやはり右耳から聞こえた。カルマは既にそっちの方角へと首を向けている。それに倣って右を向こうとしたその刹那、何かがカルマの背後を通り過ぎた。影しか捉えることが出来ないほどの高速。

一瞬遅れてまるで竜巻が通過したような風が巻き起こる。瞬きにも満たない時間。

気がつくと、カルマの首から上が消えていた。

顔を何かが通り過ぎていった左方向へと向ける。

消えたカルマの首から上が目に映った。あれだけ頑丈だったカルマの頭が、まるでホームランボールのように夜空へと打ち上げられていた。

空中で霧のように消えていく頭部と呼応して、身体のほうが塵と消えていった。

それを横目で確認しながらも、私の目は、『その後姿』に釘付けになる。

回転が止まったタイヤと地面が奏でる摩擦音を響かせながら、数百m先で『それ』が止まった。

ぶるんぶるんとまるで生き物のように唸り声を上げながら、その鋼鉄のボディを震わす真つ黒なバイクのような物体。カジキマグロのような角が生えて、照明を照らすライトは肉食獣の眼光そのもの。それに跨がるのは、真つ白な特攻服を纏った女性。長い髪が掛かる背中一面には、「夫婦円満」という刺繍が入っている。左手はハンドルを握り、そして右手には、釘が無数に刺さった木製バットが握られていた。

こつちを振り返ったその顔立ちに思わずドキリとする。その服装や跨るバイクの厳つさからは想像だになかった洗練された美人。明朗活発な内面を容易に想像させるくつきりとした目鼻立ち。けして上品とはいえないが、清涼感と猛々しさを伴った笑顔。

彼女はホームランを予告するように、釘バットの先を私に向ける。

「お嬢ちゃん。大丈夫かい？」

茫然としたまま、なんとか首を縦に振る。



「そいつあ良かった」

口角を大きく上げて男前な笑顔を見せる。

「でもその怪我じゃあ一人で帰れないだろ？ 後ろに乗りなよ。送ってってあげるからさ」

頼り甲斐のある力強い、それでいて余計な気負いの無い声。すこんと突き抜ける青空のような人という印象が胸を撃ち抜いた。

その笑顔と声は、私に大きな安堵を与えてくれた。全身の力が弛緩し、その場に腰を抜かす。今まで必死に蓋をしていた恐怖と痛みが爆発した。ぺたりと地面に腰をつけたまま、わんわんと子供みたいに涙を流す。彼女はバイクから降りて私の近くまで足を運ぶと、腰を下ろして頭をくしゃくしゃにするよう撫でてきた。

「ありやりや。気が抜けちまったかい？ でももう心配はいらねーよ」

親指を立てながら浮かべたその笑顔はやつぱり青空を照らす真夏の太陽みたいだった。

「なんが、ずみません」

涙はようやく止まったけど声はひどい鼻声。疾走するバイクの後部座席で彼女の背中にしがみつく。お尻に伝わる振動と風を切り裂く排気音が心地良い。

「はっはっはー。いーってことさ」

彼女は私が抱いていた恐怖や不安を吹き飛ばすように笑う。私はもう一度ずかずと音を鳴らして鼻を啜った。

「このバイクも霊体なんですね」

「おうとも。アタシの相棒ってやつさ。アタシはアンナ。聖アンナ。お嬢ちゃん
は？」

「ルリっていいいます。原田ルリです」

「ルリちゃんか。魔法少女として戦うのは初めてだったかい？」

「はい。あの、聖さんはベテランさんだったりするんですか？」

「アンナでいいよ。アタシはもう結構やってるね。そもそも少女って年齢でもないけどさ。あっはっはっ」

痛快な笑い声と共に背中が揺れた。襟のところ「一代目愚零怒」と刺繍があるのが目に映る。

グレイト？

聞いた事がある。私が小学生くらいの際の話だ。隣街で名を馳せていた、バイク好きの女子校生だけで構成された暴走集団。しかし耳に入るその活動内容は所謂暴走族とは一線を画す。バイクを盗み、校舎の窓を割って回る人間を狩る側の義賊的存在。

私に通っていた小学校で起きた事件にも彼女達が関わっていたとの噂があった。それはクラスで飼っていたウサギが何者かに殺された時や、同級生が高校生にカツアゲされた時にまことしやかに囁かれた風説。それぞれの犯人が近所の公園の木に裸で縛り付けられていたという都市伝説は今でも語り草になる。

「あの、グレイトって、もしかしてあのグレイトですか？」
恐る恐る尋ねる。

「はっはっ。ガギの頃のことさ。本当馬鹿やってたもんだよ」
気兼ね無く笑い飛ばされた。

青春時代の事を掘り返されて、わりと本気で恥ずかしかったのか、アンナさんは一度ハンドルから片手を離して頬を掻くと、「飛ばすよルリちゃん！ 掴まっ
てな！」と照れ隠しするように声を張り上げた。前輪が持ち上がる。私は彼女の
細い腰をぎゅっと掴んだ。

「うわ、うわわわわ」

するとしばらくそのまま後輪だけで走行すると、なんと私達を乗せたまま、バイクが宙に浮いて走り出したのだ。まるで目に見えない道が空に敷かれたみたい。

やがてどの建物も見下ろすことが出来る高度を疾走する。

対向車も通行人も居ない。車線や信号すらない私達専用の空路。

「すっごい！！！！」

自分が風の一部に溶けてしまったみたいで自然と声が漏れた。

さっきまで地べたを這い蹲るように戦っていた街を見下ろすと、別世界のよう
に夜景を煌かせていた。

「はっはー。絶景だろ？　しょぼくれた街でもさ、好きなんだよね。ふるさとつてやつだしさ。化け物どもなんか好き勝手徘徊させてたまるかってなもんさ」
私はアンナさんの背中にしがみつきながら、馬鹿みたいにくこくと頷いた。

やがてアンナさんの運転するバイクは、私の指示通りに道なき道を走ってくれた。とはいえ指示もへったくれもない。空なので方角と距離を示したらあとは一

直線だ。

家の二階の窓の近くで、真つ赤なバイクは当たり前のように中空で静止する。

「なんか普通の家だね」

「へ？ そりやまあ、そうですけど」

「ごめんごめん。悪い意味は無いんだ。ルリちゃんちよつとやばいくらい美人だからさ、どこかのお城のお姫様なんじゃねーのって思っちゃったりしたもんで

キ

「いやいやそんな。私なんて小市民ですよ」

なんといいっても近くにヅタヤがあるのがポイント高い。夜中にふとテンションが上がって、燃えロボットアニメが見たくなった時とか重宝する。紅蓮裸族とか。

バイクからベランダに飛び乗ると、もう一度アンナさんに頭を下げた。

「あの、ありがとうございます！」

彼女はやはり切符の良い笑顔を浮かべて、「いーってことよ」と手をヒラヒラさせるだけ。

「もし良かったらさ、その後ろに居るボンクラからアタシの連絡先聞いときな

よ。相談共闘なんでもござれさ」

「ボンクラ？」

そう言われて振り返る。

ゲーム機のコントローラーを手に持つ七雄が窓を開けてこちらを伺っている。

ああ、確かにボンクラだ。というか、アンナさんも知り合いだったのかな？

「よお。久しぶりだなチャライ兄ちゃん」

「おいっす。そっちはそっちで順調みてーじゃねーか」

「てめー、しつかり気合入れてこの娘守ってやれよ。じゃなかったらアタシがぶつ飛ばすかんない」

釘バットを召還するてその切っ先を七雄に向けた。顔は笑っているが目は据わっている。七雄もその迫力に押されてか、両手を胸の前で上げて、「わかっている」と苦笑いを浮かべた。いつも唯我独尊の七雄がペースを崩されている。

「それじゃアタシ行くけど、そいつはクズ野郎だからね。あんまり信用しちや駄

目だよ」

「はいわかりました」

「おいなんだその即答は」

後ろでボンクラが何か不満を呟いていたが無視。

「オヤスマミ！　ちゃんと歯あ磨いて寝ろよ！」

アンナさんはシユタつと片手を上げると、当然のように夜空をバイクで駆け抜けていった。その後姿を憧憬の眼差しでしばらく見つめる。

胸がドキドキしているのは恐怖の余韻だけではあるまい。

「おい。結構怪我してんじゃん。さつさと実体戻すとけ」

そういえば熊に挟られた霊体の肩からは、血がどくどくと流れてたんだった。

ベッドの上の自分の身体に倒れこむ。

実体に戻ると跳ね上がるように起き上がった。

肩を抑える。

痛みはなく、傷も無い。両手を握ったり開けたりを繰り返しながら、自分が戦

つたのだという実感を噛み締めた。

目に映る光景は赤黒い夜空と青い月以外は、さつきまでとは何も変わらない。

今まで自分が魔法少女として戦っていたなんて嘘のように感じる。

ベッドから立ち上がりると七雄に詰め寄った。

「誰！？　あの人？」

「何って魔法少女だよ。いや魔法人妻か」

TVの前に腰を下ろし、画面に食い入るようゲーム内の雑魚敵相手にレベル上げをしながら、品の無い笑い声を上げる。

「連絡先教えてよ」

「いーよ」

「ほら、早く」

「後でいーだろ」

「今すぐ教えなさいっての」

後ろからコントローラーをもぎ取った。

「わーったわーった」

ふう、と息を吐いて立ち上がると腰に両手を当てて伸びをする。

「あ、やつはどようしようかな」

「はあ!？」

「今日の補給で、ルリがサービスしてくれたら教えてやるよ」

補給。

ああ。

そうだ。

そんなシステムがあることは聞かされていた。

補給とレベルアップ。

実際戦ってみるまでは自分には必要無いと思っていたけど、今となつては絶対必要不可欠だとわかる。

「魔力については完全に底をついていたし、基礎能力も全然足りていない。今後也都合良く他の魔法少女に助けてもらえるとは限らないし……。」

とにかく最低限でも補給は必要。

でも……またこいつとしなきゃ駄目なの？

そんな億劫さを押しつけるのは、頭にこびりついて取れないカルマを前にした時の恐怖。

そしてなにより自身の無力感。

今は選択肢など無い……。

「……サービスって何よ？」

「そんな眉間に皺寄せんなよ。折角の美人が台無しだけぜ？」

「御託はいいから、何したらいいのか教えてってば」

「よし。じゃあ俺がしつかりルリに、男の悦ばせ方教えてやるよ」

「いいってそんなの」

「馬鹿、お前俺の教えで彼氏とラブラブだぞ？」

「はいはい。もうどうでもいいからさっさとやってよ」

再びベッドに寝転ぶ。荷揚げされたばかりの冷凍マグロをイタコばりの霊能力で自分に憑依させる。魔法少女にもなれるんだからそれくらい余裕っしょ。

私はマグロ。

私はマグロ。

覆いかぶさってくるカズキ以外の男を前に、私は心の中で必死にそう連呼する。

七雄の手が私の胸元へと伸びてきた。同時に唇が重なってくる。嫌悪感やら罪悪感で反射的に顔を横に逸らすけど、七雄の手で強引に前に振り向けさせられる。やっぱり『する』前に、カズキに電話したかったな、と後悔した。でもきつと電話したらしたで、そのすぐ後にこいつとHするなんて滅茶苦茶凹むに違い無い。

気付いたら裸にされてた。驚くほどスムーズで、「え？ いつの間に？」とび

つくりする。

他人と唇や舌を擦り合わせる感触にまだ慣れない。正直、滅茶苦茶ドキドキして意識がそっちにいつてしまう。頭がぼーってなつて、しまいには自分から見よう見真似で舌を絡めにいってしまう始末。歯茎の裏を舐められながら、カズキもこんな事してくるのかなあ、なんて考えながらも、私も同じように七雄の歯茎の裏を舐めにいく。

そんな風に熱中しているから、服を脱がされているのも、向こうが脱いでいる事にも気付けない。

なんだか昨日した初めての時よりも身体が熱い。

カズキに対して胸が痛むのに、何故だか下腹部がじんじんと痺れだしてきた。

さつきまで命がけで戦っていたせいだろうか。

すごく不安だった。怖かった。その直後にごつごつとした男の人に抱かれるのは、正直すごく安心する。

そんな折に、「ルリってマジでスタイル凄いよな」などと溜息交じりに口にされる、悪態をつく余裕もない。

「……あ、ありがと……」

素直にお礼で返してしまう。

馬鹿か。

七雄の両手が左右から挟みこみように私の胸を揉み上げ、そして谷間を作るとそこに顔を埋める。

「この弾力、もう最高」

「いちいち言わなくて良いし」

「Fくらい？」

「……知らない」

本当は正解。恥ずかしさのあまり顔を背ける。電気を消しているとはいえ、カーテンから漏れる月明かりでも十分向こうの肌の質感が見て取れる。きつと向こうも、私の身体が丸見えなんだろう。他人に裸を見られるのってこんな感覚なんだ。ありえないくらい恥ずかしい。

でも、なんだか、開放感も抱いてしまう。

初めての時は何が何やらわからなかったけど、今改めて思う。

セックスって、こんななんだ。

吐息が重なりそうな距離で見つめあい、お互いの肌を擦り合わせる。

こんなの、興奮しないほうが嘘だよ。

好きとかそうじゃないとか関係無いじゃん。

そりゃ嫌いだと流石に駄目だろうけど、まあ七雄は、嫌いではない、かな？

ちよつと胡散臭いし、腹が立つこともあるけど、正直、すごいイケメンだし。

全然マグロになんかなれない。

「んっ……あっ」

舌の先端だけでペロペロと舐めあい、胸を揉まれながら乳首を指で撫でられる。つつい変な声が出てしまう。ぶりっこしてるみたいな、高くて甘えるような声。普段なら絶対こんな声出さない。カズキにだって聞かせたことないような声。

「あっ……んっ、やっ……はあ、ん」

駄目。我慢出来ない。

さつきから太ももを撫でてくる、硬い男の人のあれの感触も、ドキドキを加速させてくる。つついちらちらと盗み見てしまう。

「ルリも吸って」

そう言つて舌を突き出してきた。一瞬意味がわからなかつたけど、きつとこゝういう事なんだろうと思つて、唇で啞えこみ、そしてちゅうちゅうと音を鳴らす。鼻がくつつきそうな距離で七雄と見つめあいながら、その舌を吸う。頭の奥がとろんと溶けていく感覚。

舌を吸いながらも、視線はまた勝手に七雄の下腹部に。まるでハンガーみたいにぐいっと上に反り返つた形。

昨日の初めての時は、怖くて仕方なかつたのに、今はなんだか頼もしさすら感じる。その形状に加え、大きく膨らむ出つ張つた部分が、ごりごりと私の中を力強く引つかくことを知っている。無意識に生唾を飲み込んでしまった。

また七雄と目があう。

私の手を取り、そしてあそこへと誘導する。

指先が赤黒く高張つた肉棒の先端に触れる。

熱い。

そして硬い。

握つてほしいのかな？

多分、そうなんだよね。

私が舌を吸ってるから、どうしてほしいのか聞けないじゃん。

あ、唇を離せば良いだけか。

……。

でも、離せない……。このまま舌を巻き付かせたままでもいい。

いいや、握っちゃえ。

……すごい。

改めて、その熱さと硬さを手の平で感じる。その力強さに胸がぎゅうって締め付けられた。

臉が微かに落ちる。頭だけじゃなく、身体の芯がとろりと溶けていく。

「……入れちゃおっか？」

舌を自ら離し、そう尋ねてくる七雄に対して、私の唇は寂しさを覚えながらも、やはり誰にも聞かせたことの無い甘ったるい声で、「……うん」と答えていた。

昨晚初めて男の人を受け入れた私のお腹の中は、一日経ってもどこか違和感を残したままだったが、こうしてまた繋がると不思議とその違和感が消えた。有る

べきモノが収まったという安心感すら憶えた。

「あつ、あつ、あつ、んっ……あんっ……はう、ああ……」

まるで遅い男性器が埋められているこの状態こそが、女としての自分のあるべき姿だと錯覚してしまいそう。

「いやっ、強いっ、やだやだっ、もつとゆつくり」

「強い好きだろ？」

「好きじゃない……こんなの、好きじゃ、あついっ、んっんっあっはっ！」

私に覆いかぶさり、腰を突き出してくる男はにやにやと下卑た笑いを浮かべている。当然腹が立つ。女を見下す目の前の男と、見下されて当然の自分に。

それでも私は文句の一つも言えずに、むしろ自分から腰を下から突き上げるよう振っていた。

「やっ、声、恥ずかしいん、だつてば……んっ、あつ、くう……あんっ！ あんっ！ あんっ！」

「大丈夫。ルリの喘ぎ声、可愛いぜ」

「ば、ばか……あっあっあっあっあっ！」

見え透いたお世辞でも、こうして肌を重ねながら言われると、湧き上がる多幸

感を抑えるのは難しい。

「やだっ、それっ！ はげしいのっ、やつ、息、できないっ、からっ！」

「良い顔するようになったじゃん」

「だめっ、だめっ、やだ、これやだ。何か変、何か変だよっ……お腹の底から、じんじん昇ってくる……あんたが動く度、何か変なの昇ってきてるっ！」

反り返った硬い肉の棒で奥を擦り上げられる度に、腰から背中にかけて電流のような痺れがそわそわと溜まっていく。

未知の快感ではない。昨日、嫌というほど教えられた女の快樂。それでも浮遊と落下を同時に体験しているようなこの感覚は、まだ怖い。

何も考えられなくなる。

恐怖を取り消し、そして成就したばかりの淡い恋心すら忘れさせる。

「あっ！ あっ！ あっ！ いっ、いいっ！ だめっだめっ！ これっ、だめえっ！ タンマ！ 一回タンマ！ カズキ、やつ、助けてっ！」

ついさっきまでは、恋人を守る為に命がけで戦っていたのが嘘のよう。他の男にだらしない喘ぎ声を聞かせてしまっている。

ちりちりと電流が脳天に溜まっていく。



死を覚悟した瞬間ですら想っていた恋人を考える余裕がない。この後すぐにも訪れるであろう、恐怖が入り交じった絶頂に全身がうち震えている。

この男に抱かれる悦びを、全身で噛み締めている。

「あつ、んっ、きちやうっ……きちやうよ……もう頭の中、じんじんしたので、一杯になっちゃってるっ……もう、我慢出来ないよ……あつ、あつ、あつ、あああつ」

「ほら、イク時は昨日教えた通りな？」

七雄は口端を歪めながら、突かれる度に暴れるように揺れる胸を宥めるように揉んでくる。

誰が、あんな、馬鹿みたいな事。

微かに残った理性が、七雄に対して抵抗する。

が、それは口には出ない。そしてそんな意志すらも、絶頂直前の頭を覆う白い波に攫われ消えていく。

「いく、いく……あああ、ルリのおまんこ、セックスでいっちゃうっ！」

力強さの象徴のような男性器に溶かされ、蕩けきった私の女の部分は、屈服することに幸せを感じていた。嫌悪感すら抱く男の教えを従順に守り、そんなはし

たない言葉を口にしながら、私の背中は爆ぜるように反り返った意識に至っては、もう完全に真っ白。

薄っすらと思考能力が戻ってくると、自分の奥深くに他人が入っている感覚とともに、同時に激しい罪悪感に苛まれる。その他人に対して、恋愛感情の欠片も持っていない。それどころか怒りすら抱いている。しかしその男が顔を寄せてくると、私は期待していたかのように目を瞑り、そして唇を半分開けて、その舌を受け入れる。

息苦しいほどの絶頂の余韻の中、舌を伝い流し込まれる唾液をうっとりしたまま飲み込んでいく。喉をどろりと落ちていく生暖かい唾液が心地良い。それだけで身体が微かに震えた。

私は一体どんな顔で七雄と見詰め合っていたんだろうか。

「もっと欲しい？」と尋ねられてしまう。

そんなもの欲しそうな目をしていたのだろうか。恥ずかしくて仕方が無い。それでも私の顎は一人でにこくりと頷いた。もはや終わって欲しいとも思わなかった。して欲しいとも思っていないがはず。七雄がしたいなら、満足するまでしてほしい、なんて我ながら腹の立つ媚びた一念が勝手に男に甘えた。

今度は唇を合わせずに、上から唾液を落としてくる。それを口を開いて受け取りながらも、私の中で存在感を示す彼の性器が気になって仕方が無い。

頭で唾液で、腰は性器で、もう私は完全に溶かされていた。どろどろになった意識の中、なんとか恋人に対して謝罪を繰り返す。

ごめん。

「あつ♥ うそっ、そんなとこまで、入ってっ、あっあっあっ♥」

ごめんなさい。

「いっ♥ いっ♥ あっあっんっん、奥、あんま、しちゃ駄目えっ！」

それが精一杯。

今現実繋がつている男に「セックス気持ち良い？」と尋ねられたら、馬鹿みたいに繰り返してしまおう。

「ちゃんとルリの口から言っって」

「……セックス、気持ち良い」

ご褒美といわんばかりに、ちゅ、と啄ばむようなキスをされる。同時にきゅん、と膣が締まるのが自分でもわかった。悔しくて顔を横に向ける。

「もっと動いてほしい？」

横を向いたまま、頷く。

「もつとセックスしたい？」

一瞬躊躇。

でも、頷く。

「言えって」

七雄は薄ら笑いを浮かべたまま、冷たい口調でそう言う。ピストンを中断させた。

頭の中をぐるぐるすると色々な気持ちが駆け巡る。

大部分はやはりカズキの事。

大好きな彼氏のこと。

胸が張り裂けそう。

でも今は、今だけは、

「……もつと、セックス、してほしい」

自分の中を押し広げるように埋没する男の人が、全く動いてくれないのが切なくて仕方が無い。

「いいよ。ルリが俺のこと、気持ち良くしてくれたらな」

「なんで私が！？」とはやはり言えない。

実際口に出るのは、「……どうしたらいいのかわかんないし」などという甲斐甲斐しい言葉だけ。

「パイズリ。教えるから。な？」

そう優しげに微笑み、素早く唇を重ねてきた。……イケメンは色々卑怯だと思
う。

七雄が離れる。私の中から他人が抜ける。私を支配していた力強い存在が無く
なると、まるで大きく穴が空いたような虚無感が襲う。そこにあるべきものが無
くなった喪失感に襲われる。

未練がましい目でそそり立つ七雄の性器を見つめる。

「ほら、ルリも上半身起こして……膝で立って、そう」

ベッドの上で仁王立ちになる七雄の前で膝立ちする。丁度性器が目の前。七雄
が少し動くだけで、それに連られてぶるんと揺れる。

「……はう」

その様子を目にしただけで、思わず吐息が漏れた。

「それじゃ、その巨乳で俺のちんこ挟んでみようか」

「そんなの、無理だって」

「ルリのならいけるいける」

膝だけで前に進み、七雄のヘソに口を着きそうなくらい近づく。

「ほらおっぱい持ち上げて、挟んでみ？」

言われたとおり、胸を両手で左右から持ち上げて、長く反り返った肉棒を挟んでみる。驚くくらいすっぼりと、私の胸の中に隠れる。

「ほら、すげえじゃん。俺の全部包むとか」

七雄は楽しそうに笑ってる。なんだか馬鹿みたい、と若干冷静になれた。

「で、どうすればいいの？」

「そのまま擦ってみて」

「こうか？」

「左右で入れ違いのサイクルで。あと唾垂らして」

「んっ」

にゅっ、にゅっ、にゅっ、とやらしい音が、胸とちんこが擦れることで生まれる。

「そうそう。ああ、いいわ。ルリのおっぱいプリプリだから肉厚すげえ。完全に

包まれてちんこ見えねーし」

やたらと嬉しそうに七雄ははしゃいでいる。正直悪い気はしない。折角こんな事やってあげてるのに、ぶすつとされたら切れそう。

それだけ喜んでくれたら、と私の胸を動かす手にも熱が入る。

むにゅ、むにゅ、むにゅ。

胸の中で熱い肉の棒が、さらに硬さを増しているのがわかる。無意識に唇をぺろりと舐めた。

時折谷間から亀頭が顔を覗かせる度に、私の下腹部がうずうずするように落ちて着きを無くす。

いつの間にか七雄の方からも腰を振っていた。タイミングを合わせるのが難しいので、私は胸をぎゅゅと左右から挟みこむことだけに専念する。

まるで私の胸を膣のように、七雄がピストンしてくる。私も熱い肉棒が外れないように、ぎゅゅと谷間を作り続けた。自分の身体を完全に性の捌け口にされることに対し、胸が苦しくなる。でもけして、嫌な気分ではない。

いや、嫌な気分だけど、でも……なんなんだろう。この感情。よくわからない。

七雄は必死に腰を振っている。私はその顔を見上げながら、時折唾を垂らす。ぐっちゃや、ぐっちゃや、ぐっちゃや、と普通にセックスしてるのと変わらない音が響き渡る。

「ああイキそ」

胸のなかで、ぐぐぐ、と肉棒が膨張したのがわかった。その瞬間を予感してごくりと喉を鳴らす。何かを期待するように鼓動も早まった。

「いいか？」と苦しそうな声で聞いてくる。

私は黙って頷いた。時折顔をちらつかせる亀頭を見つめ、七雄にも聞こえないよう、「……きて」と呟いていた。

私は事もあろうか期待してしまっていた。私の胸で、私の身体で、盛大に射精してもらおう喜びを、待ち望んでいてしまっていた。

より大きく肉棒が膨張したかと思ったら、根元がびくびくつと打ち震え、赤黒い亀頭から、爆発するように精液が放出された。

首下に向けて、びゅっ、びゅっ、と白い粘液が掛けられていく。

自分の胸の中でびくびくと震え続ける生殖器を茫然と見つめながら、そこでようやくこれじゃ補給にならないことに気付く。

それでも私は胸でそれを包みこみ続けた。ただ七雄を気持ち良くしてあげただけなのに、悪態の一つもつかず、彼の射精をより良いものにするために、胸の谷間でちんちんを圧迫し続けた。

さっきまでは完全に私の身体の支配権を奪っていた七雄が、顔を歪めるほどに快感に浸っているのを見るのは少し愉快だった。

熱い粘液が谷間で液溜まりを作っていく。

勢いこそ無くなったものの、尿道から絶え間なく精子がどろりと漏れ出ていくさまをじっと見つめる。

すごい。男の人の『イク』って、こんななんだ。

七雄が離れると、私も胸から手を離す。

受け止めていた谷間という皿が無くなると、溜まっていた精液はどろりとヘソまで一気に垂れていった。

不思議と不快感は無かった。汚いとは思えなかった。

それよりも、目の前の七雄の腰が少し震えているのと、はあはあと息も荒げているのがちょっと嬉しかった。

セックスの相手が気持ち良いと、ついつい私も嬉しくなる。恋人でもなんでも

ない相手だとわかっていても。

だから、「そのままフェラしてみよっか。教えるからさ」と言われて、何の抵抗もなく七雄を口で啜えた。まだ少し精液が垂れてきたみたいで、口の中になんともいえない苦味が広がる。

とりあえず啜えたまま適当に舐めてみる。七雄は頭に手を置いて、色々と指示してくるから、とりあえずその通りにする。するとすぐに、その硬さを口の中で取り戻した。なんというか、やはり嬉しい。頭をぼんぼんと撫でられる。

「もっかいしよっか」

私は口を離し、手で根元を扱きながら、「まだ補給してもらってないし」と無愛想に答える。

「わり。ついな。その代わりに、今夜はガンガンしまくってやっから」

「そんな出来ない」

「俺、ルリなら五回は出来るな」

「無理。死ぬっつうの」

鼻で笑って、そして自らもう一度、その大きく膨らんだ亀頭を啜える。

七雄は「うっ」と腰を引かせながらも、「じゃあ何回なら良い？」と聞いてき